

「ダビデとメシア」

ルカ 20:41-44

2020. 9. 13 南与力町教会

序：文脈—イエス様の方からの質問

ルカ福音書の 20 章からはイエスと敵対者との論争、議論が続いてきました。イエスを何とか陥れようとイスラエルの指導者たちはさまざまな質問を投げかけました。しかしそのすべてにイエス様は見事に答えられ、ついには 20 章 40 節にありますように「彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった」と言われています。もうイエス様に何も質問しなくなったのです。

しかし今日の箇所ではイエス様の方から彼ら（律法学者たち）に質問をされるのです。そしてこれが論争の最後となっています。

①主イエスの質問とその意図—どのようにしてメシアは「ダビデの子」であり「ダビデの主」であるか

・質問の内容

20 章 41 節

「イエスは彼らに言われた。「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。」

当時、人々はメシアを「ダビデの子」と呼んでいました。旧約聖書においてメシアはダビデの子孫として現れると預言されていたからです（サムエル記下 7:12-13、イザヤ 11:1-10、エレミヤ 23:5-6）。そして旧約と新約の間のいわゆる「中間時代」に「ダビデの子」がメシア称号となったのです。イエス様はそのように人々がメシアはダビデの子であると言っているのはどうしてか、とお尋ねになったのです。もちろんイエス様は旧約聖書が、メシアはダビデの子孫から出てくると預言していることをご存じだったはずですが。しかしその上で、このことを質問した理由が 42 節から語られています。

「ダビデ自身が詩編の中で言っている。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで」と。』

これは先ほどお読みいただいた詩編 110 編 1 節からの引用です。最初に出てくる「主」がヘブライ語でヤハウエ、神様のことです。次に出てくる「わたしの主」というのがメシアを指しています。すなわち神が私の主であるメシアに語った言葉が記されているのです。それは「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで」という言葉です。神様がメシアの敵を彼の足台とされる、足元に屈服させる。その時まで、わたしの右の座に着くように命じておられます。

この詩編はメシアを指し示すものとしてユダヤ人たちの間でも読まれていたようです。イエス様も 44 節で次のように質問し直されました。

「このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」

・質問の意図

これで今日の箇所は終わっています。非常短い、シンプルな箇所だと言えるでしょう。しかしそれだけにイエス様がここで何を言おうとされたのか様々に議論される箇所でもあります。イエス様は二度同じような質問をされています。まず41節で「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか」と言われ、最後の44節でも「このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか」と問うておられます。ではイエス様はメシアがダビデの子であることを否定しようとしておられるのでしょうか。ここの言葉だけを読むとそのような印象を持つかもしれません。しかし、ルカ福音書に記されているイエス様の誕生物語においてはイエス様がダビデの家から出たことが繰り返し示されていました（ルカ1:27, 32, 69, 2:11）。さらにイエス様ご自身、盲人から「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と大声で言われた際、それを受け入れ、盲人の目を開かれました（ルカ18:35-43）。そのように考えていくと今日の箇所でもイエス様は「メシアがダビデの子である」こと自体を否定しておられるわけではなさそうです。

では一体、イエス様は何を問い、問題にされているのでしょうか。

41節と44節でイエス様は「どうして」と訳されています言葉は、元の言葉では「なぜ」ではなく、「どのようにして」「いかに」という意味の言葉です。英語で言うならば「Why」ではなく「How」という言葉が使われているのです。イエス様は「なぜ『メシアはダビデの子だ』と言うのか」とそのように言うこと自体を否定しておられるのではなく、「どのように、どういう意味で、どのような仕方で」そう言うのか、ということの問題にしておられるのです。それが問題となるのは、ダビデ自身が詩編の中でメシアを「わたしの主」と呼んでいることとの関係においてです。普通、親が自分の子どもを「わたしの主」と呼ぶようなことはありません。例えば、ダビデの子であるソロモンはダビデの後を継いで王となりましたが、ダビデはソロモンを「我が主」と呼ぶようなことはありませんでした。しかし詩編の中でダビデは自分の子であるはずのメシアを「わが主」と呼んでいる。もしメシアがダビデの子だとするなら、ここでは親子関係、上下関係の逆転が起こっているわけです。それゆえ、イエス様は「このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか」。どのような仕方でメシアがダビデの子であると言えるのか。メシアが「ダビデの子」でありつつ、「ダビデの主」でもあるというのはいかにして可能となるのか。このことをイエス様は問うておられる。問題にしておられるのです。

イエス様がこのことを問われたのは、当時の人々が「ダビデの子」と呼んでメシアを理解をしていたそのメシア像、メシア期待が不十分なものであったからでしょう。イエス様は言わばその急所を突かれたのです。

では当時の人々のメシア期待とはどのようなものだったのでしょうか。イエス様の前の時代（紀元前70年から40年頃）にファリサイ派のユダヤ人によって書かれた「ソロモンの詩編」という文書がありますが、その中に「ダビデの子」という言葉が出てきます（17章21節）。それゆえそこには「ダビデの子」ということで当時の人々がどのようなメシアを期待していたのかが反映しているはずです。そこに描かれているのは地上的政治的な王そして民族的な王です。かつてのダビデ王のようにイスラエルのために国を建て直してくださる。そしてイスラエルの敵である異邦人を滅ぼし、その支配からイスラエルを解放してくれる。そのような「ダビデの子」メシアを期待し、待ち望んでいたのです。

しかしイエス様からすればそのようなメシア理解は不十分なものであったのです。それゆえ、イエス様は詩編 110 編を引用しつつ、人々のメシア理解を問い直された。あなたがたはメシアはダビデの子だと言っているが、それはダビデ自身がメシアを「我が主」と呼んでいることとどのように調和するのか、両立するのか、と。

③質問への答え—正しいキリストの理解を持つことの大切さ

今日の箇所には答えがありません。並行箇所のマタイ 22 章 46 節には「これにはだれ一人、ひと言も言い返すことができ」なかった、と記されています。実際誰も答えることができなかったのでしょうか。そしてイエス様ご自身も答えを教えるはおられません。しかしルカ福音書の続編として記されました使徒言行録 2 章 30 節から 36 節のところには、この問いへの答えと言えるものが、使徒ペトロの口を通して語られています。そこを開いて読んでみたいと思います。新約の 216 ページです。

「ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。そして、キリストの復活について前もって知り、／『彼は陰府に捨てておかれず、／その体は朽ち果てることがない』／と語りました。神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。』』だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

メシア（キリスト）はダビデの子孫であったが、神によって復活させられ、天に昇り、神の右の座に着かれたことによって、この詩編の御言葉が実現した。そのようにして神はイエスを主とし、メシアとなさった。すなわち「復活と昇天」によってメシアは「ダビデの子」でありつつ、「ダビデの主」となられた。ここにイエス様が出された問いに対する答えがあります。

しかしイスラエルの人々はそのようなメシア理解を持っていませんでした。それゆえにイエスが自分たちのメシア期待にそぐわないと分かったときには、それまでイエスの話に好意的に耳を傾けていた民衆も指導者の側に立ち、ピラトに向かって「十字架つけろ、十字架につけろ」と叫び続け、メシアであるエスを殺してしまったのです。

私たちももしイエス・キリストに自分の都合の良い期待のみ押し付けるならば、それがかなえられないときにはイエス・キリストにつまずいてしまう、信仰においてつまずいてしまうということが起こるのではないのでしょうか。それゆえイエス様が教えて下っているように聖書に基づいて正しいメシア理解、キリスト理解を持つことが、私たちの信仰の歩みにおいて決定的に重要なのです。

結論：

イエス・キリストは人々から理解されず、受け入れられず、十字架にかけられて殺されてしまいました。しかし神は聖書に書かれている通り、イエスを復活させ、天に上げられ、ご自分の右の座に着かせられたのです。キリストはもうすでに神の右の玉座に着き、真の王として全世界をご自分の国としてご支

配し、統治なさっています。私たちをご支配し、守り、導いてくださっています。一方、キリストの敵はまだ滅ぼされたわけではありません。キリストに敵対する力、罪や死の力がこの地上においてはなお働いています。それゆえに私たちはまだ苦しみ、悲しむことがあるのです。しかし、詩編で「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするときまで」と言われているように、やがて神様がキリストのすべての敵をキリストの足元に屈服させられる時が来るのです。そしてその時に神の御国は完成します。私たちはそのことに希望を置いて、イエス・キリストを「我が主、我が王」と信じ、受け入れ、このお方に従ってまいりましょう。